

地域素材を活用した中学校社会科授業の検討—熊谷空襲の教材化—

教科教育高度化プログラム・社会系教育サブプログラム 21AF201

小池 美花

【指導教員】 桐谷 正信 小貫 篤 高橋雅也

【キーワード】 教材化 地域素材 歴史的分野

1. 研究関心や問題意識

大学では日本史を専攻しており、教職課程:社会科教育法の授業で、地域を題材にした授業展開を考え、実際に授業をすることがあった。また、地域学習の一環として身近な地域の土地利用を調査する「フィールドワーク」を行った。そこで感じたことは、自分の住んでいる地域について知っていることが少なかったこと、地域の地理や歴史を学習することで学びが深まるということである。この体験から、地域素材を授業に取り入れることは子どもの学びに貢献すると考えた。

新中学校学習指導要領（平成29年告示）社会編では、旧中学校学習指導要領（平成20年告示）社会編にある「身近な地域の歴史を調べる活動」の趣旨を受け継ぎ、より一層着実に実施されることを重視しており、今回の改訂の要点のひとつとして、「様々な伝統や文化の学習内容の充実」が挙げられている。そこでは、「身近な地域の歴史」において、具体的な事柄を通して受け継がれてきた伝統や文化への関心を高めることや、それらの特色の理解につながる学習が求められている。加えて今回は、「主体的・対話的で深い学び」の実現を重視した学習指導の改善もかかげており、子どもが主体的に、自ら進んで学ぼうとする姿勢も求められている。

しかし、実際にそうした授業を行おうとしても、地域の教育資源は教材化されていないものが多く、教員は利用しようにも入手先が分からなかったり、あるいは授業での扱いに悩んだりすることもある。それどころか、現実には、時間との兼ね合いから教科書の内容を終わらせることで精一杯、という教員も結構多いのではないかと想像される。

2. 研究の目的と方法

本研究は、中学校社会科（歴史的分野）において、身近な地域素材を取り入れた授業を検討することを目的とする。

地域素材は、子どもにとって入りやすく、積極的に取り組める教材と思われるが、その効果はそれだけではないと考えている。梅原（1972）は、郷土の具体的な資料から日本史を理解させる研究を行った。郷土資料に触れたクラスと教科書を中心としたクラスとでは、前者の方がより具体的に学習内容を理解できる。つまり、身近な地域素材（郷土資料などを使用）を取り入れることで、歴史的事象をより具体的に理解させることができるということが期待され

る¹⁾。また、社会科の目標の中に、「社会的事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に理解しようとする態度を養う」とある。主体的に学ぶことに関しても地域素材は有効なのではないかと考える。

本研究で扱おうとする地域素材は、「熊谷空襲」である。熊谷空襲を扱うことにより、「戦争の悲惨さや恐ろしさ、そこから得られる平和の尊さ」や「戦時下の国民生活」を学ぶことを考え、授業を構想し、教材化を試みる。

(1) 「身近な地域」について

本研究を行う上で、「身近な地域」の定義について確認する。中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編では、「生徒の居住地域や学校の所在地域を中心に、生徒自身による調べる活動が可能な、生徒にとって身近に感じることができる範囲であるが、それぞれの地域の歴史的な特性に応じて、より広い範囲を含む場合もある。」としている。

(2) 地域素材の活用

先行研究において、「地域素材」がどのような内容を持つものとして位置づけられているかを確認する。

地域素材を効果的に活用し、教材化する方法として、学習材²⁾の観点から地域素材を位置付けた外池（2005）の理論が挙げられる³⁾。

外池は、地域素材を、教える題材としての「教材」ではなく、学ぶ題材としての「学習材」として捉え、①資料的学習材（文献資料、遺物資料、民俗資料、図像資料、映像・音声資料、地図資料、統計資料、現物資料）、②臨場的学習材（資料館的施設、遺跡・史跡、地形、景観、伝統芸能）、③人的学習材（戦争体験者、就業者、異文化理解関係）に類型し、秋田県下の高等学校の実践を事例に、地域素材活用の現状と学習活動の連関を明らかにしている。

また、地域素材の特性と意義について、「地域素材には、実際の場合や実際の人物、そして実物などといった資料の一次性に迫ることが容易であるという特性がある。このことは、社会事象への本質的理解や事実究明への探究心を養おうとする社会科において極めて重要な特性である。」と述べている。そして、地域素材の活用について、単に興味関心をひきつけ、調べる方法を習得するものではなく、事実の本質的追究にこそ活用されるべきであるとしている。さらに、歴史学習における地域素材は、一方的に与え

られる二次資料、構成された歴史叙述の提供による歴史学習を見直し、歴史学習の本質的在り方を問い得る学習材であるとの見解を示している。

その他の分野では、平和学習における地域素材の活用との必要性を説き、高等学校で実践を試みた例がある³⁾。

(3) 先行研究と本研究の位置づけ

本研究では、歴史学習における地域素材の活用として位置づけ、2(2)で記述した外池(2005)の地域素材の類型化のうち、①資料的学習材(映像・音声資料)、②臨場的学習材(資料館的施設)、③人的学習材(戦争体験者)に焦点をあてる。地域素材を教えるのではなく、地域素材で教えることを意識する。

3. 「熊谷空襲」の教材化と実践に向けて

(1) 教材化への視点

a 教材の選定

本研究における「身近な地域」は、埼玉県熊谷市である。市の歴史で主なものを次に示す⁴⁾。

時代	主な出来事や人物、文化財等
原始・古代	・塩古墳群 ・甲山古墳 ・宮塚古墳 ・短甲武人埴輪 ・馬型(形)埴輪
中世	・熊谷次郎直実 ・熊谷家文書 ・斎藤別当実盛 ・妻聖聖天山
近世	・中山道の宿場町 熊谷宿 ・秩父街道 秩父道しるべ
近代	・竹井澹如(熊谷県の誕生に貢献した) ・荻野吟子(日本最初の女性医師) ・熊谷染
現代	・熊谷空襲 ・市町村合併 ・上越新幹線の開通 ・さいたま博覧会 ・埼玉国体

このうち、本研究で取り扱うのは昭和の熊谷を語る時に忘れてはならない事柄であろう「熊谷空襲」である。熊谷空襲は、1945(昭和20)年8月14日午後11時30分頃から約1時間にわたり行われた空襲で、「日本最後の空襲」と呼ばれている。82機の米軍B29から6発の大型爆弾と8049発(581t)の焼夷弾が投下された。この爆撃により市街地はたちまち猛火に包まれ、市街地の74%(35万8千坪)、全戸数の40%(3630戸)が廃墟と化した。罹災者は約15,390人、そのうち死者は266人、負傷者は約3,000人に及ぶ埼玉県で一番の大きな被害を受けた。戦後の昭和25年8月16日から毎年、空襲により犠牲となった方々の霊を慰めるために、星川で灯籠流しの行事が行われている。

日本が敗戦してから現在まで多くの月日が流れ、年を経るごとに戦争を体験した人は高齢化し、本当の戦争の悲惨さや残酷さを知る人は減少している。いま、現代が戦前にならないためには二度と戦争を起こしてはならない。そのメッセージを“戦争を知らない世代”の私たちが後世に伝

え残していくことの重要性は年々増していると考えている。このようなことから、熊谷空襲を地域素材として設定する。

熊谷空襲を教材化するにあたり、これまでどのように伝えられてきたのか、殊に学校教育との関わりを調べた。市の教育委員会への聞き取りを行い以下の内容の回答を得た。(聞き取り日:2022年2月21日)

学校での「熊谷空襲」の取り扱い方・位置づけ等について

【回答者】熊谷市教育委員会社会教育課 中嶋史和様

<質問内容>

- ・社会科、総合的な学習の時間、道徳、特別活動でどのように扱われているか。
- ・扱われている場合、どのように扱いが異なるのか。
- ・市教委で独自教材を開発・共有しているか。
- ・過去に、熊谷空襲をテーマにした研究プロジェクトが展開されたか。
- ・熊谷空襲を題材とした実践記録はあるか。
- ・社会科、総合的な学習の時間、道徳、特別活動でどのように扱われているか。
- ・扱われている場合、どのように扱いが異なるのか。
- ・市教委で独自教材を開発・共有しているか。

【回答】

市教委として、「熊谷空襲」を授業で取り扱ってほしいということはありません。なので、扱いは各学校で異なるでしょう。市教委で作っている教材などもないです。

- ・過去に、熊谷空襲をテーマにした研究プロジェクトが展開されたか。
- ・熊谷空襲を題材とした実践記録はあるか。

【回答】

現状では、ないです。ただ、歴史的分野の戦争の単元で、地域の方をお招きして授業を行ったということはありません。また、県立平和資料館において熊谷空襲を題材としてアニメを借用できます。それから、くまびあという施設に平和資料展示室があります。そこに子どもたちを見学させたことはあります。

追加質問

- ・熊谷市内の小学3・4年生に配布される副読本『くまがや』に熊谷空襲の記載はあるのか。

【回答】ない

このように熊谷市としては、熊谷空襲を伝える活動は少ないことがわかる。しかし、2022年12月、市議会で動きがあった。熊谷市議会の定例会において、熊谷空襲の戦跡を生かした平和行政についての一般質問が行われた。いくつか質問がある中、「戦争遺跡を教材とした教育の現状も含めた市としての活用状況と課題」に注目した。回答は、社会科や総合的な学習の時間等で実施した学校があるということであった。詳細には、熊谷空襲の戦跡遺跡の見学が1校、熊谷市立熊谷図書館郷土資料展示室の空襲コーナーの見学が12校、授業等で熊谷空襲に触れたのが21校ということである(令和元年度から令和3年11月現在)。小学校では身近な地域のことを学ぶ機会が多いことからこのような結果が出たのではないかと推測される。一方、中学校では行われた事例はないようである。熊谷空襲と学校教育

との関わりは希薄だが、熊谷市教育委員会からは戦跡保護や活用について前向きな回答が得られた。これからの市としての取組に期待する。

b 学習指導要領とのつながりと授業での取り扱い

本研究において取り扱う地域素材は、以下の内容で中学校学習指導要領（平成29年告示）社会編とのつながりが考えられる。

- ・内容A(2)身近な地域の歴史
- ・内容C(1)近代の日本と世界(ハ)第二次世界大戦と人類への惨禍

このうち、内容Cに位置づけた授業を構想していきたいと考えている。内容Cは以下の通りである。（傍線筆者）

内容C(1)ア(ハ) 第二次世界大戦と人類への惨禍

経済的世界的な混乱と社会問題の発生、昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国の政治・外交の動き、中国などアジア諸国との関係、欧米諸国の動き、戦時下の国民の生活などを基に、軍部の台頭から戦争までの経過と、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解すること。

この内容の「戦時下の国民の生活」に着目する。この点について、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編には、「身近な地域の事例を取り上げるなどして、戦時体制下で国民の生活がどう変わったかについて着目するとともに、平和な生活を築くことの大切さに気付くことができるようにする。」とあり、その部分の身近な地域の事例として熊谷空襲を取り上げるとする。

c 学校と社会教育施設との連携

身近な地域素材を取り扱う際は、専門的知識を要することから、社会教育施設（博物館、図書館等）との連携を図ることも求められている。

中学校学習指導要領（平成29年告示）社会編における歴史的分野の「内容の取扱い(2)イ」には以下のように記されている。（傍線筆者）

3 内容の取扱い(2)イ

(2) 内容のAについては、次のとおり取り扱うものとする。

イ (2)については、内容のB以下の学習と関わらせて計画的に実施し、地域の特性に応じた時代を取り上げるようにするとともに、人々の生活や生活に根ざした伝統や文化に着目した取扱いを工夫すること。その際、博物館、郷土資料館などの地域の施設の活用や地域の人々の協力も考慮すること。

また、「総則」では、学校と社会教育施設の連携について、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるに当たって、具体的な方法が示されている。（傍線筆者）

第1章 総則 第3 教育課程の実施と学習評価

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

(7) 学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、生徒の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。また、地域の図書館や博物館、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。

地域の博物館や郷土資料館、美術館などを活用する博学連携による教育活動への効果と課題としては、以下のようなことが挙げられる⁵⁾。

<効果>

- ・社会教育施設が有する地域の人的・物的資源を学校教育に生かすことができ、多様で豊かな学びの機会を子どもに与えることができる。
- ・実物を実際に見たり、触れたりといった体験活動を通して、主体的・対話的で深い学びの実現が期待できる。

<課題>

- ・博物館、美術館等の効果的な利用の仕方がよくわからない。
- ・博物館、美術館等の収蔵品や遺跡をどのように教材化したらよいか悩んでいる。

これらの課題を克服し、児童生徒の学習効果を高めるための手立てが必要となる。

また、地域史学習に関する博学連携の可能性を研究した北林（2015）らによれば、実効性の高い博学連携を推進するためには、教育の専門家と文化財の専門家がそれぞれの立場を生かして有機的に協働することに主眼が置かれるべきであるとしている。そのための博学連携として、以下に示す3つのステップを立案した⁶⁾。

- i) 教師：学校において、学習者の関心を惹起できる地域史学習を展開する
- ii) 学生：目的意識を持って地域の博物館等を訪れる
- iii) 学芸員：個々の関心に応じた情報提供と、所蔵する〈知の資源〉に関する情報を発信する

学習者の関心を惹起することに焦点化した学習方法は学習者を地域の博物館等に向かわせる契機となることが効果として示された。

d 教材としての特徴・効果

熊谷空襲は、太平洋戦争終戦間際におきた出来事であり、それを教材化することは、戦争体験を教材化することでもあるといえる。父母の戦争体験の教材化を試みた阪上（1975）は、戦争を知らない子どもたちに戦争の実態をイメージさせるために有効な手段であると戦争体験を教材化することの意義を述べている⁷⁾。

熊谷空襲を扱うことにより、「戦争の悲惨さや恐ろしさ、そこから得られる平和の尊さ」や「戦時下の国民の生活」を学ぶことができると考える。その際、教材として、空襲の被害状況がわかる資料、戦争体験者証言ビデオや戦

争体験者から直接お話を伺う場を設けるなどを考えている。

(2)授業実践 (全3時間)

・分野：歴史的分野／・対象学年：第3学年

a 授業展開

	学習活動	手立て
1 時 間 目	<p>学習課題 戦争によって、人々の生活はどのように変化したのだろうか？</p> <p>・戦時下の人々について、「学校生活」「食べ物」「マスメディア・情報」の3つの視点から考える。 ・当時の衣服などの実物を見て、戦時下の暮らしについて理解する。</p>	<p>・実物資料の提示 貸出キット ・映像資料の提示</p>
2 時 間 目	<p>学習課題 戦争体験者の声を聞いて、戦時下の人々の生活についての理解を深めよう。</p> <p>・戦争体験者のお話を聞く。</p>	<p>・戦争体験者の話を聞いた感想や疑問等を記入するよう指示する。</p>
3 時 間 目	<p>学習課題 戦争が起こると人々や社会の状況はどうなるのか？ 戦争により人々は何を失ったのだろうか？</p> <p>・1、2時間目の学習内容を踏まえて戦時下の人々の生活についてのまとめをする。</p>	<p>・戦争体験者が話していた内容の補足説明をする。 ・戦跡を示し、自分たちが住む地域で起きていた事実への関心を高める。</p>

実地研究Ⅱ期間の社会科授業の一部を使用して、全3時間の授業を実践させていただいた。今回の授業では「戦時下の人々の生活」に焦点をあて、その中に地域素材(熊谷空襲)を取り入れた。1時間目は、戦争中当時の人々が使用していた国民服やもんぺなどを熊谷市立熊谷図書館からお借りして、実物を見せながら学習を進めた。2時間目は、戦時下に生きた人を学校に招いて、直接お話をさせていただき機会とした。1時間目で学習した内容と関連させた質問を用意して戦争体験者の方にお話していただくという形で実施した。3時間目は、戦争体験者の話を振り返ると共に、熊谷空襲の被害状況や戦跡について学習した。実習先の中学校は熊谷空襲とも関わりのある場所に位置しており、そのようなことも含め、生徒が学習内容を身近に感じ、理解が深まるように工夫した。

b 成果と考察

地域素材(熊谷空襲)を取り入れた授業について、授業者(筆者)と生徒の両面から述べる。授業者としては、教材研究に力を入れた。地域素材のことを文献等で調べ知識を増やし、学習指導要領との関連も含めて授業展開を考えた。また、地域素材は学校外の方の協力も必要であり、学校内と地域の方(市民団体や社会教育施設など)とのすり合わせはとても重要であることを学んだ。授業者が地域素材を取り入れることによる学習のねらいを明確にしておくことが必要である。地域の教育力を学校に取り入れる際は、学校内の理解も得ておくと言滑に授業準備を進めることができると感じた。課題点はあるが、地域素材を授業に取り入れることは他の教員も興味を示していたので、社会科にとどまらず教科横断的に活用していけると良いのではないかと考える。

生徒については、地域素材に対して興味を示していた。実物資料を見せたときは前のめりになって説明を聞く生徒、空襲の被害状況図を見るときは「俺の家はこの図だどこの辺りかな」というように自分のことに置き換えて見ている生徒が見受けられた。また、戦跡を紹介したときは知っているという反応をした生徒が多くいた。自分の生活の中にある身近な場所・地域は生徒自身の知っていることが多く、興味関心を引き出せたのではないかと考える。全3時間の授業後、何人かの生徒に授業への感想や意見を聞いたところ、「身近に感じられた」「実物資料が新鮮だった」「戦争体験者に直接お話を聞いたことが印象に残った」などの回答があった。また、授業プリントでは、熊谷空襲の詳しい内容や空襲後の復興のことについて知りたいと書いた生徒もいた。生徒の主体的な学びに繋がる手立てとして地域素材は有効ではないかと考える。

身近な地域という生徒たちが知っている場所に着目し、そこにある素材を授業に取り入れることは、生徒の興味関心を引き出し、主体的な学びへの架橋になるものではないか。研究当初は歴史的事実を具体的に理解するために地域素材が貢献するという予測であったが、今回の検証授業の場合は地域素材のうち、実物資料(資料的学習材)と戦争体験者から直接話を聞いたこと(人的学習材)によって具体的に学習内容を理解した生徒が多かった。

(3)教材化への提案

熊谷空襲を授業に取り入れるときに活用できる資料や施設を以下に挙げる。学習内容やねらいに応じて使用する教材を選択し、授業で活用していただきたい。分かりやすくするために、「読む」「見る」「歩く」「聞く」の視点⁸⁾から述べる。

読む **見る**

<社会教育施設>

・熊谷市立図書館 郷土資料展示室

など

空襲時を再現した模型などを展示している。熊谷空襲に関する書籍コーナーを設置。熊谷市立熊谷図書館所蔵品を貸し出している。学芸員と連絡を取り、借りることができる。(※貸出は腐敗等防止のため熊谷市内の学校に限る)

・体験記

『市民のつづるー熊谷戦災の記録ー』
『熊谷空襲の戦禍を訪ねて』

など

◆熊谷空襲関連資料・パネル貸出キット一覧					
物資料					
No.	名称	点数	No.	名称	点数
1	軍長靴	1組	11	水筒	2
2	ヘルメット	2	12	飯ごう	2
3	軍防暑帽	1	13	防毒マスク	1
4	軍服(下)	1	14	標準服(上下)	1組
5	防空頭巾	2	15	もんぺ	1
6	飛行双眼鏡	1	16	海軍軍服(上)	1
7	軍ラッパ	1	17	海軍軍帽	1
8	ゲートル	1組	18	国民服(上)	1
9	カバン	1	19	軍帽(夏用)	1
10	雑のう	1	20	灯火管制用電気笠	2

▲貸出キット一覧表(一部抜粋)

・埼玉ピースミュージアム(埼玉県平和資料館)

昭和初期から終戦までの期間を中心に、県民と戦争との関わりを歴史的な移り変わりの中で理解できるように展示している。戦時下の学校や防空ごうのセットがあり、戦時下の人々の生活や空襲というものを疑似体験できる。また、随時イベント(「戦時中の体験を聞く会」や「戦争体験者証言ビデオ上映会」等)を行っている。実物資料や映像資料も豊富に揃っており、熊谷空襲を体験された方の証言者ビデオもある。

・くまびあ 平和資料展示室

戦時中の様子を撮影した写真や熊谷空襲で廃墟になった市街地の写真などが展示されている。証言ビデオ4本を視聴できる。この他の証言ビデオは熊谷市役所庶務課に問い合わせることで借りることができる。

・桶川飛行学校平和祈念館

熊谷陸軍飛行学校桶川分教場(熊谷陸軍飛行学校の分校)の様子を知ることができる施設である。

<文献等>

・「全国主要都市戦災概況図」戦災概況図 熊谷(国立公文書館デジタルアーカイブ)

熊谷空襲の被害状況がわかる。

ICTを効果的に活用したい教材である。タブレット端末等を用いて生徒が各自で表示できるようにすると見やすく、被害状況の位置関係がわかる。現在の地図との比較をすることで、より生徒の身近に引き寄せる。

・戦争体験者証言ビデオ

熊谷市戦後50周年 平和ビデオ

戦後70年 最後の空襲都市 熊谷 女性の証言

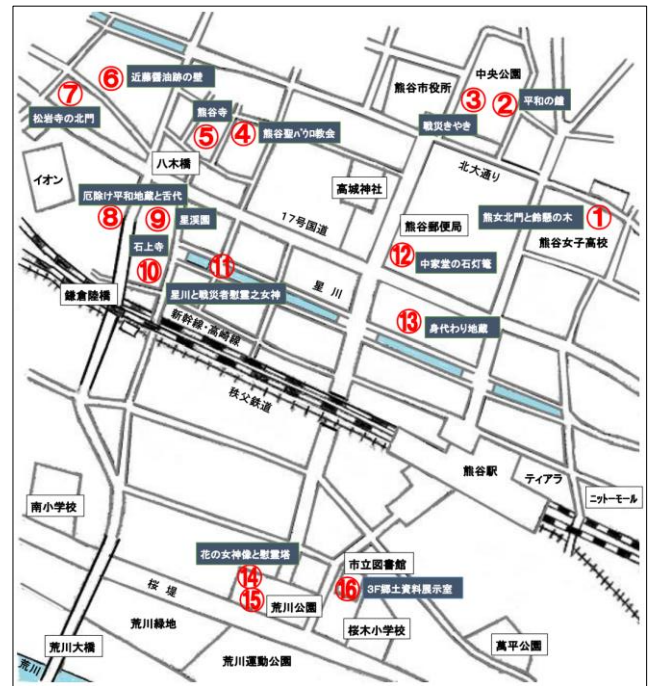
歩く

熊谷市内には、熊谷空襲の跡が残されている。高齢化が進み戦争体験者が減少していく現代において、戦跡は戦争の事実を後世の人々に伝える大切な財である。戦跡を巡るフィールドワークは通常授業時間では厳しいが、生徒たちの知っている場所に戦争の跡が残っていると知るだけでも、戦争、熊谷空襲という歴史的事実を自分に引き寄せて考えることが期待できる。

戦跡を歩くことで77年前に熊谷で何が起こったのか、当時の人々の暮らしに思いをはせることができるのではないかな。

「熊谷空襲を忘れない市民の会」会員の方が作成した戦跡マップをもとに、筆者も実際に戦跡を見て歩いた。

▼熊谷空襲戦跡巡りのマップ(作成:熊谷空襲を忘れない市民の会⁹⁾)



▼熊谷空襲の戦跡(市街地)¹⁰⁾(写真:筆者撮影/撮影日:2022年4月5日)

熊谷女子高校北門と鈴懸の木(マップ①)	
<input type="checkbox"/> 熊谷高等女学校(現:熊谷女子高等学校)北門	埼玉県内で唯一空襲により焼失した高校校舎は焼失したが門だけは残った。黒く焦げた跡や破損した跡が見取れる。空襲当時のことを伝えるものとして、あえて修復はしていないようである。

<input type="checkbox"/> すずかけ 鈴懸の木 	<p>とても大きい。高校の校舎の2～3階ほどの高さがある。</p>	<input type="checkbox"/> 熊谷寺 (マップ⑤) 	<p>境内に植えられた木々により、本堂や鐘楼、聖パウロ教会などが焼失を免れたという。空襲時は市民の避難所や救護所として、戦後は焼失した西国民学校や熊谷高等女学校の教室として使用された。</p>
熊谷中央公園の戦災けやきと平和の鐘			
<input type="checkbox"/> 戦災けやき (マップ③) 	<p>熊谷市役所は、旧熊谷西国民学校 (空襲により焼失した埼玉県唯一の小学校) の跡地に建っている。隣接する中央公園には、熊谷空襲により焼け残ったケヤキ8本が中央公園に移植されている。</p>	<input type="checkbox"/> 厄除け平和地藏 	<p>1957 (昭和32)年、市民有志が熊谷空襲で亡くなった人々の慰霊のために建立した。</p>
<input type="checkbox"/> 平和の鐘 (マップ②) 	<p>中央公園には、熊谷ライオンズクラブにより寄贈された「平和の鐘」がある。毎年8月6日、8月9日、8月15日には、鐘が鳴らされ、戦争犠牲者の冥福を祈り恒久平和を誓う。</p>	<input type="checkbox"/> 舌代 	<p>舌代とは、口上書きのことである。平和地藏の前に置かれた舌代¹⁾には熊谷市民有志の思いが書かれているが、経年劣化により読むことが難しくなっている。</p>
中家堂の石灯籠			
<input type="checkbox"/> 中家堂の石灯籠 (マップ⑫) 	<p>店の看板であった石灯籠は、土蔵が軒並み崩れるほどの業火に炙られた。明治中期に造作された石灯籠は、[宝珠・笠・火袋・中台・棹・露盤]の6部から成っていたが、これらは空襲により倒れ散った。宝珠と笠には焼夷弾による黒い焦げ跡が確認できる。</p>	<input type="checkbox"/> 弘法大師 (※非公開) <input type="checkbox"/> 戦災ケヤキ 	<p>熊谷空襲で全焼したが、多くの戦跡が残されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・弘法大師は顔が焼けており、当時のまま保存されている。 ・しめ縄通りに焼け跡が残っている。それを包み込むように樹皮が再生している。 ・本堂側より瓦が片面3枚あるが途中から2枚になっている。2枚の部分が空襲で焼けて修復したところである。
聖パウロ教会と熊谷寺			
<input type="checkbox"/> 聖パウロ教会 (マップ④) 	<p>煉瓦造りの所々に焦げ跡が確認できる。</p> <p>1919 (大正8)年、アメリカ人ウィルソンにより建設された。建物は総煉瓦造りで、1923 (大正12)年の関東大震災に耐え、1945 (昭和20)年8月14日～8月15日の熊谷空襲の被災をも免れている。</p>	<input type="checkbox"/> 塀の瓦 	

星川と戦災者慰霊之女神	
<input type="checkbox"/> 戦災者慰霊之女神 (作:北村西望) (マップ⑩) 	<p>多くの市民が犠牲になった星川の上に建立された。女神像の裏には、空襲により亡くなられた266名の名前が刻まれている。</p>
<input type="checkbox"/> 身代わり地蔵 (マップ⑬) 	<p>熊谷空襲で焼失した久山寺の跡地の一面に、空襲や戦地で亡くなった戦争の犠牲者の慰霊のため、民間実業家によって建てられたお地藏様である。</p>

今回巡った戦跡は熊谷市街地に残るものの一部である。市街地の他、広域にも熊谷空襲の記憶を残すもの¹²⁾はあするため、機会を作り巡りたい。

聞く

熊谷空襲を体験された方に直接お話を聞く機会を設ける。空襲や戦時下の生活について話すことができる人は、80歳・90歳を超え、高齢化してきているためとても貴重である。

戦争体験者から直接話を聞く際に留意することは2つあると考える。1つは、どんな視点から、どんな側面に注目して取り扱うのかということである。これによってどの方に話を聞くのか、体験者を選択する。授業者が生徒に考えさせたい課題に即した内容や生徒が知りたい内容を盛り込み、質問項目を作成しておく。体験者が話す内容を把握したうえで話していただくためには事前の準備を欠かさない。生徒も単に話を聞くだけでなく、事前学習として授業で戦争のことを学習する。

もうひとつは、体験者の無理のない範囲でお話していただくことである。体験者の大半が80歳・90歳を超えており、身体に不自由なところを持つ方がいる。目や耳、足腰など体験者によって対応が異なる。本研究でご協力いただいた熊谷空襲・戦争体験者の方は目と耳が不自由であった。また、戦争体験という怖い体験は思い出したくない人もいる。質問によっては答えたくないものもあるので、質問項目を考える際は留意したい。

4. 今後の課題と展望

本研究では、実地研究の授業実践を通して、地域素材(熊谷空襲)を教材化することを検討できた。授業実践では、「戦時下の国民生活」(ミクロな視点)に地域素材を取り入れるかたちとなっていた。これに加えて、リアリズムに基づく当時の国際関係を取り扱うべきという指摘が出てくる。当時の戦争を理解させるためには、戦争にならざるをえない当時の国際関係(マクロな視点)も取り扱うべきである。本実践では、歴史の授業が終わった段階であり、戦時下の国際関係との兼ね合いを展開に含められなかった。今後はマクロな視点とミクロな視点の双方を関連させた実践を試みたい。

教育の中に地域素材を取り入れるときは、地域素材に自分事としての理解を深めることは重要である。その点に関しては継続して生徒の様子を観察することはできなかった。今後の課題とする。また、地域素材(熊谷空襲)を教材化するにあたり、地域団体や社会教育施設の方の力をお借りした。地域素材開発を通して、学びは学校内で完結されるものではなく、学校の外との連携も重要になることを改めて感じた。地域素材に対する学校や市、地域住民の関心は様々であるので、その教材を通して伝えたいことを明確にし、今後も実践を積み重ねていきたい。

熊谷空襲を教材化することは、戦争が社会や人々に与えた影響を理解することに繋がっていくと考える。そして、戦争体験者が減少する現代で、戦争の恐ろしさや平和の尊さを次世代に語り継いでいくことの一助になることを期待したい。

注釈及び参考文献

- 1) 梅原 勇「歴史学習における郷土資料の扱い方—郷土資料の収集とその活用—」(『社会科教育研究』巻33号 p11-p24、1972年)
- 2) 外池 智「高校歴史学習における地域素材の活用と学習活動との関連—秋田県下高等学校の実践報告を事例として「学習材」の観点から—」(『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第27号、2005年)
- 3) 愛沢 伸雄 千葉県立安房南高校/現代社会
高校「現代社会」憲法平和主義学習 特設授業「かきた婦人の村と従軍慰安婦問題」
愛沢は、平和学習の意義を確実に把握させるため、戦争の事実を心に刻み、平和や人権の問題として自己に迫ることができ、生徒の気持ちにフィットした地域教材のあり方を探った。その中で、地域の人々の生活や文化に、戦争の傷跡が深くかかわっていることに着目した。戦争の傷跡を「国家レベルの視点からだけではなく、歴史の波に揺り動かされながらも、さまざまな思いで生きていた地域の人々からの視点から問い直し教材化することも、いまの生徒たちには必要ではないか。」川田 文子『授業・「従軍慰安婦」：歴史教育と性教育からのアプローチ』(教育史料出版会、1998年) p156-p178
- 4) 熊谷市ホームページ 熊谷の歴史探訪「熊谷の五つの歴史」

<https://www.city.kumagaya.lg.jp/kanko/rekisi/itunorekisi/>

[index.html](#)

5) 埼玉県立総合教育センター 平成 30～31 年度 調査研究

「学校と社会教育施設の連携に関する調査研究～社会に開かれた教育課程の実現に向けて～〈中間報告〉」(研究報告書 第 405 号、2018-2019 年)

6) 北林 健二、斉藤 理「地域史学習に関する博学連携の可能性について」(山口県立大学学術情報 第 8 号〔大学院論集 通巻第 16 号〕、2015 年 3 月)

7) 阪上 順夫『戦争体験の教材化と授業』(明治図書、1975 年)

8) 伊藤 純郎『調べてみよう地域・郷土—総合的学習で役立つ』(ぎょうせい、2000 年)

9) 「熊谷空襲を忘れない市民の会」の方々が献身的に行っている戦跡巡りだが、20 年以上前にも実施されていたようである。当時の見学コースは、「図書館第一会議室(ビデオ視聴「最後の空襲くまがや(アニメ)」(・当時の星川、駅、町並みの様子・講話 田倉米造氏)→熊谷通運倉庫(・焼けた罐詰の話など)→清水橋(・旧中山道 復興の工事中いろいろと問題の多かった星川最後の橋)→埼玉県立熊谷女子高等学校(・県内唯一戦災を受けた高等女学校(鉄カブトの話など)→市役所(・県内唯一戦災を受けた西国民学校跡(市役所通りに移されたケヤキの話など)・講話 並木甚氏)→青木四郎氏宅(宮町 2 丁目)(・現在も残っている朽ちかけた防空ごう)・講話 青木四郎氏)→検察庁・法務局合同庁舎(・旧市役所、公会堂跡)→熊谷寺(・樹木が熊谷寺と東側民家を救った話など)→北村写真館(・昭和 20 年 8 月 16 日の写真(桜町通りから一番街方面の様子)・講話 北村謙一氏)→冠木医院・松岩寺付近(・焼け残ったカベ・焼け残った松岩寺の門)・講話 中島迪武氏)→佐藤自転車本店(・故佐藤虹二氏宅の後片づけ等写真)→厄除平和地藏小屋(・昭和 32 年建立)→星溪園(・焼けた此君亭と茶室跡)→石上寺(・焼けた本堂・焼け残った太子像、ケヤキ、イチョウ)・講話 岡安哲也氏)→旧竹井家(・本陣跡)→旧ナオキヤ(・焼夷弾で直撃を受けた当主故藤間源一郎氏の話他)→戦災者慰霊之女神像(星川)(・空襲 30 周年に建立)・平和のシンボル)・講話 田部井栄作氏)→田部井ビニール店付近(・旧星川跡)→お祭り広場(・復興のあと)・グリーンベルト 防火帯)→身代地藏尊(・久山寺跡)・昭和 30 年 6 月建立)・講話 清水福太郎氏)→慰霊塔→図書館

(引用:熊谷市立図書館 美術、郷土係『熊谷空襲の戦禍を訪ねて』(熊谷市立図書館、1995 年)

現代においては、「熊谷空襲を忘れない市民の会」の皆さんが企画し、2022 年 9 月に熊谷女子高校日本史学部の生徒(その他希望者を含む)とともに戦跡めぐりが行われた。戦跡巡りの様子は、熊谷女子高等学校のホームページ (https://kumajo-h.spec.ed.jp/blogs/blog_entries/view/397/d792ceac3d5417932b8d9a9e690044be?frame_id=425)や朝日新聞(2022 年 9 月 18 日)、埼玉新聞(2022 年 9 月 19 日)の記事に掲載されている。この事例は、熊谷空襲を授業で取り入れたものではなく、部活動の一環として行われたものである。(モデルコース所要時間:約 3 時間)

10) 戦跡の詳細は、『最後の空襲 熊谷 8 月 14・15 日 戦禍の記憶と継承』(社会評論社、2020 年) p192-p198

11) 舌代に書かれた詳しい内容については『最後の空襲 熊谷 8 月 14・15 日 戦禍の記憶と継承』に記載がある。

「舌代 顧るに昭和二十年八月十四日夜半より 翌十五日に亘り、吾が熊谷全市は火の海と化し、言語に絶する混乱状態となりたり。折しも星川の流に身を投じて避難せる人々は、川の両側に並ぶ家屋の焼落ちる火と火との間に、哀れにも狂い死をなしたる者多大なり。又無残や大火傷を受け、薬石 効無く遂に尊い一命を失った者驚く勿れ全市に於て其の数実に二百有余名なり。そのお気の毒な方々の最後を思いやり、情厚き全市有志の皆名様と共にここに平和地藏尊並火伏地藏と唱えて建立せしものなり、斯くのごとき死 亡者の中には身寄り頼り無く不幸此 の上も無き靈魂の為に何卒一片の香花手向け下さる様御願ひ申し上げます。昭和三十三年一月熊谷市有志一同 堂守 杵屋二十五代目 新井龍吉」

12) 広域には、集団疎開先となった寺院や旧小原陸軍飛行場などがある。詳細は、『最後の空襲 熊谷 8 月 14・15 日 戦禍の記憶と継承』(社会評論社、2020 年) p199-p204 に記載されている。

その他

・牛田守彦「教室レポート 東京<多摩地域>の戦争遺跡に学ぶ」(『歴史と地理』第 610 号 p25-p32、山川出版社、2007 年 12 月)

・熊谷空襲を忘れない市民の会 編

『最後の空襲 熊谷 8 月 14・15 日 戦禍の記憶と継承』(社会評論社、2020 年)

・埼玉県立総合教育センター 平成 30～令和元年度 調査研究「学校と社会教育施設の連携に関する調査研究『社会に開かれた教育課程の実現に向けて』【最終報告】」(研究報告書 第 411 号、2018-2019 年)

・文部科学省『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)』

・文部科学省『中学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説社会編』

・文部科学省『中学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説総則編』

・歴史教育者協議会 編『歴史地理教育(284)』(歴史教育者協議会、1978-11) p92-p93